「法闡院病中日記」と島田筑波

深瀬泰旦
順天堂大学医学部医史学研究室

日本医史学雑誌第五十三巻第二号　平成十八年十二月十九日受付
平成十九年　六月二十日発行　平成十九年　四月　八日受理

〔要旨〕江戸お玉ヶ池種痘所の発起人の一人、幕府寄合医師添田玄春の実母である法闡院が、天保一三年（一八四二）八月一二日に発病してから一〇月一五日にいたる病状をしるしたのが「法闡院病中日記」である。この二ヶ月間に往診をうけた医師をはじめ、見舞におとずれた人物、見舞の到来物などが記載されている。

本写本には島田筑波による識語がしるされているので、添田家の事蹟を明らかにした島田筑波、ならびに江戸学の重鎮森銑三と日本医史学会との関連についても考察をくわえた。

キーワード――「法闡院病中日記」、添田玄春、伊東玄朴、島田筑波、森銑三

はじめに

法闡院はお玉ヶ池種痘所の発起人の一人であり、幕府寄合医師添田玄春の実母である。この法闡院が天保一三年（一八四二）八月一二日に発病してから、一〇月一五日までの約二ヶ月にわたる病状をしるしたのが順天堂大学山崎文庫が所蔵する「法闡院病中日記」（以下「病中日記」と略す）である。[1]

この写本によって二ヶ月の間に往診をうけた医師をはじめ、見舞におとずれた人物、見舞の到来物などは明らかになったが、病状についての記述はごく簡単なのでどのような病に冒されていたかは不明である。ここに識語をしるした島田筑波と江戸学の重鎮である森銑三について、日本医史学会との関連を解明しえたので報告する。

「法闡院病中日記」について

本写本は一六・四cm×一二・二cm、三二丁の横小本である。扉には「天保十三寅年／日記／八月十二日吉祥」とある。封面に

此書は神田和泉橋に住せし官医添／田玄成の妻が発病の天保十三寅年／八月十二日に初まり、十月十四日迄の看／病日記なり、而してこの病人は十二月廿二日に歿す、種痘司／添田玄春はその子なり

との識語があり、巻末にも

法闡院願誉清白光融大姉／天保十三寅年十二月二十二日歿／蘭医添田玄成妻／浅草区永住町浄土宗了源寺／ニ葬ル／昭和四年八月／島田筑波記

とある。封面の識語に署名はないが、巻末識語と同じ筆跡なので島田筑波の筆になるものとおもわれる。島田筑波はこのころ添田道周についての論文[2]を発表しており、その論文で「病中日記」にふれているので本写本を入手した

のはそれ以前のことであろうと思われる。のちに詳しくのべるが、添田家の事蹟を接点にして医史学との関連が生まれるのもちょうどこのころのことである。

「病中日記」から医師と思われる人物をひろってみると、伊東玄朴をはじめ、西川玄泰、岸田元碩、甲斐静庵、林玄宙、真嶋瑞伯の名がみえるが、その記述内容や表現方法からみると、治療にあたった医師としては伊東玄朴を中心にした西川玄泰、岸田元碩の三名であろうと思われる。伊東玄朴はいわずとしれた当時の名だたる蘭方医であり、西川玄泰はお玉ヶ池種痘所の設立資金を拠出した八三名の中に名がある伊東玄朴の門人であるが、玄朴の門人帳にその名はみえない。岸田元碩についてはまったく不明である。

法蘭院は天保十三年（一八四二）八月十二日朝六ッ時に発病した。この日は西川玄泰、岸田元碩の二名の医師がただちに往診した。翌一三日もこの両名が往診しているが、岸田元碩には「朝見舞帰、夕より見舞夜詰、朝帰」との注記がある。これは一三日の朝一度往診し、一旦かえったが、夕方また往診し、その夜は添田家にとどまって治療に専念し、翌一四日朝にかえったということである。蛇足ながら江戸から明治にいたる間は、「見舞」という単語は現今の意味の「病気のお見舞」とはまったく異なり、医師の往診をさしていた。十四日には伊東玄朴の往診があり、西川元泰は「夕方より夜詰」――すなわち夕方から往診して、そのまま夜通し病床の傍らにあって治療をおこなった。これ以後一〇月一四日までの六二日間に、伊東玄朴の往診は二三回、岸田元碩は一一回、西川玄泰は九回にわたっておこなわれている。

「病気お見舞」の医師たち

他の医師たちの来訪は回数もすくなく、大福餅などの見舞品を持参しての来訪なので、これをもってすると医師としての立場での「見舞」ではなく、知人としての立場でのいわゆる「病気のお見舞」であろうとかんがえられる。

甲斐静庵は、江戸切絵図の「東都下谷絵図」（文久二年）によって和泉橋通にある添田玄春邸の隣人であることがわかる。隣人として、また知人としてのお見舞といえよう。林玄仲は「添田玄春日記」[3]（以下「玄春日記」と略す）にしばしば登場する医師である。玄春の父寄合医師玄成が嘉永元年五月一六日に四四歳で死亡し、その跡式相続がかなって同年八月四日に玄春は二三歳で家督を相続した。この日の「玄春日記」には

殿様おめて度御家とく御請、御登城、御供、溝口様江も行く、御客来候人之名前左ニ記ス、

とあって、溝口讃岐守直清、川勝準之助の名にまじって、馬島瑞伯、林玄仲、戸田玄固の名がみえる。また同年八月二五日は玄成の百ヶ日のお逮夜にあたり、林玄仲が悔やみに添田邸を訪れており、嘉永三年五月一五日の三回忌のお逮夜にも弔問におとづれている。嘉永五年一二月八日条に「御本丸御広敷見習被仰付」とあるのは、おそらくそれまでの小普請医師から寄合医師への昇格を含みとしたお目見であると思われるが、その翌日の一二月九日にはその祝いに林玄仲が玄春邸を訪問している。またこの年の夏には玄春が林玄仲宅に暑中見舞に出向いている。これは「病中日記」より後のこととはいえ、わずか数年しか経過していないので、この両者の間はきわめて親しい間柄であったということができよう。

このことは中橋広小路にすむ百俵五人扶持の寄合医師であり、眼科医としても名高い馬島瑞伯についても同様である。[4,5]「病中日記」には真嶋とあるが、『寛政重修諸家譜』によれば馬島が正しいようである。「玄春日記」には嘉永二年三月二日条には玄春の長女お鉄が眼病をわずらって馬島の診察をうけており、嘉永五年の本丸御広敷御目見にあたってはいち早く馬島瑞伯が祝賀にかけつけている。馬島隠居が来訪したり、元康――宗寿か宗円かは不明――をまじえて将棋を指したり、暑中見舞にでかけたりという家族ぐるみの交際であったことがわかる。安政六年には玄春が馬島の病気にあたって往診している。

ほかには親戚筋にあたる溝口讃岐守と堀本一甫の名がある。溝口讃岐守直清は伊勢守直道の子息で、このころ中

奥小姓をつとめる五千石の旗本である。法闡院は溝口氏から添田玄成へ嫁して長男玄春をうんだ。[6]

堀本一甫は奥医師法眼の家柄で、代々一甫を名乗っている。玄春の五世の祖豊寿の女が堀本一甫顕晴のもとに嫁ぎ、この時以来両家は姻戚関係にあった。[6]

添田家の家族構成

天保一三年のこの年、添田家の当主幕府寄合医師玄成は三八歳。妻の法闡院の年齢は不明であるが、文政九年（一八二六）生まれの長男玄春が一七歳なので、その母にあたる法闡院はおそらく三二、三歳であろう。

法闡院は五千石の旗本溝口伊勢守直道の娘である。直道の嗣子にあたる讃岐守直清はのちに浦賀奉行から外国奉行に昇進して困難な外国との交渉にあたり、とくにドイツ特命全権公使フリードリッヒ・オイレンブルクとの通商条約交渉の場に臨んだこともある。「玄春日記」には甥にあたる玄春が実母の実家である溝口氏にたいして、限りない誇りをもっていた様子がえがかれている。直清の役替にあたっては、その事実がかならず記されていることによっても明かである。[6]

法闡院の死後、いつのことか確定はできないが、玄成は二千八百石の旗本川勝氏から後妻をむかえた。これが「玄春日記」に「御前様」として頻繁にしるされている玄春の継母である。

玄成には玄春のほかにどのような子弟が存在したか、これについては史料不足のため明らかにすることはできなかった。

法闡院の病状経過

この日記にみる病状はほとんどが大小二便の排泄に関する事項でしめられているなど、記述はきわめて簡単であ

る。筆録者については記載がないので判然としないが、病状経過の記述としては

十二日より御便秘之処、十八日之夜七ッ半時御通事有之候、十九日之早朝又御通事有之候以上（八月一八日）

夜七ツ時御大便御快通被遊候、然も大ブリ御通事被遊候以上（八月二五日）

廿五日之夜七ツ時大便快通被成候、今日迄日数七日ヲ経テ御通事無之処、今日五ツ半時然も太ブリト御大便被成御快通候以上（九月二日）

夜御小水之儀度々被遊候、御大便之処ハカタク少々被致候（九月一七日）

夜四ツ時御大便水瀉被遊候（九月二〇日）

早朝御通事程能有之候（九月二二日）

御小水之儀は度々被遊候、朝御通事少々（一〇月二日）

などであり、これ以外の症状としては

夜七ッ半時御　服（ママ）痛甚ク被遊、伊東玄朴江御使仕候（九月一七日）

のほかに

夜御痰気ニ御座候

との記述が一〇月一二日、一三日の両日にみえるだけである。これだけの症状記述から、法闡院の病気がどのようなものかを解明することは不可能であろう。

法闡院死去の日

日記の記載は一〇月一四日でおわっているが、島田筑波の識語によると法闡院はこの年の一二月二二日に死去したという。一〇月には一旦快方にむかった症状が一二月に悪化したのであろうか。しかし「玄春日記」の法闡院に

ついての記事からみて、これがはたして正しい事実であるか否かについては検討を要する。すなわち「玄春日記」の嘉永元年条に、

法闡院様御七回忌御取越ニ付所々へ御配物遣ス（一一月八日）
法闡院様御七回忌御待夜ニ付キ了源寺方より納所二人来（一一月二一日）[3]

とある。これをみるかぎりでは嘉永元年一一月二二日に法闡院の七回忌がおこなわれたのは明かである。法闡院が死去したのはさきにのべたように天保一三年なので、嘉永元年はまさに七回忌の年にあたる。しかしその忌日ははたして島田筑波が「病中日記」の封面にしるしている一二月二二日であろうか。あるいは「玄春日記」にある一一月二二日なのであろうか。歳末多忙の時期の一二月末になって法事をおこなうことをさけて、一ヶ月繰り上げて営むということは現今では往々にあることで、そのような慣例にしたがったとも考えられるが、これはあくまでも推測の域をでない。とはいえ「玄春日記」が自らの母親の七回忌の忌日を誤って記述するとは考えられない。

島田筑波が、玄成の妻の発病より死にいたるまでに伊東玄朴に療治をうけた病床の日記がのこっていると自らの論文[2]においてのべていることによって、島田筑波が玄春の妻奇勢子の実家にあたる江沢家から手にいれた反古類のなかに「病中日記」があり、これに目をとおしていたことはまちがいない。この論文が発表されたのは昭和四年四月なので、これからみると「病中日記」の識語にある昭和四年八月という日付は、島田筑波が「病中日記」を入手した日ではなく、法闡院を取り巻く周囲の状況がかなり明らかになったのちにこの識語を記入したといえよう。わずか数行の識語ではあるが、これだけの事実でも明らかにしえたのは、さきの論文をまとめた後でなければできないことである。

島田筑波のこの論文には『寛政重修諸家譜』から引用した系図の傍らに戒名が付記されている。「法名は了源寺の過去帳から私が新しく書加へたものである」との注記にあるように、『諸家譜』にはない法名が加えられている。こ

の論文において道周の後裔について、

また妻は玄成に先立ちて天保十三年十二月二十二日に没して法名を法圓院願誉清白光融大姉と云ふ。この玄成の妻の発病より死に至るまで伊東玄朴に療治を受けた病床の日記が残ってゐる。(72)

とのべているので、法圓院の戒名と忌日も菩提寺である了源寺の過去帳から引用したものであることはまちがいない。忌日が過去帳には一二月二二日とあり、「玄春日記」には一一月二二日とあって、なぜ一ヶ月の齟齬が生じたのか。島田筑波が過去帳から転記するさいに誤記したとは考えられないであろうか。わたくしには「玄春日記」の記事が誤りであるとはどうしても思えないのであるが、根本史料ともいうべき菩提寺である了源寺の過去帳が太平洋戦争の東京大空襲で焼失してしまったいま、それを確かめるすべがないのは残念といわざるをえない。

法圓院の療養状況

「病中日記」には病状の記載のほかに、見舞に訪れた人物や持参した見舞の品があげられている。一例として八月一四日の記事をあげておこう。

○十四日

夕より夜詰　岸田元碩
御薬貝詰二ツ　西川元泰
御重之内三ツ　伊東玄朴
玉子重詰　安田津多　御出被下
センベイ一ツ　松平駛之丞

折詰　一ツ　内□で
ヲコシ　一折　福井町　御見舞

「夕より夜詰」とは西川元泰が医師であることから、夜通し法闡院の枕頭で治療にあたっていたことをしめしている。安田津多や福井町の親戚からいろいろな見舞の品がよせられていることもわかる。「夜詰」は医師にかぎられたことではなく、松永壱岐や山口観竹、森尾直次郎などの知人をはじめ、福井町久蔵のような親戚と思われる人々の名もしるされている。

八月一七日には戸田玄固が観音様に参詣しており、八月一九日には「早朝観音様エ御百度、水ヲアビテ参詣、玄固代参」とあり、さらに九月一五日には「観音様御百度　四人」とある。この観音様とはおそらく浅草の観音様であろう。九月一九日には「鉄砲州御旅所参詣」、一〇月五日には「早朝水天宮様御百度上候」とある。鉄砲州御旅所とはおそらく鉄砲州稲荷、一名浪よけ稲荷内の御旅所であろうか。水天宮とは芝赤羽にある筑後国久留米藩有馬中務大輔の上屋敷内にある水天宮であろう。大名の屋敷内にありながら町人にも参詣を公開していたので、毎月五日のご縁日には参詣するものがおおかったという。当時の最高の医師から治療をうけながらも、お百度をふんだり、水垢離をかいたりと、神仏の加護にすがろうとする慣習を退けることができない状況をうかがうことができる。

観音様に参詣した玄固は、「玄春日記」にしばしばでてくる戸田玄固である。さきにのべた林玄仲同様に玄成の時代から添田家とはごく親しい関係にあった医師である。「玄春日記」の嘉永元年には玄成四九日のお逮夜（七月四日）や、玄春の家督相続の祝い（八月四日）に玄春邸に来訪し、嘉永三年の玄成三回忌のお逮夜（五月一五日）にも弔問に来訪している。嘉永五年一二月八日に本丸御広敷見習を仰せつけられたおりには、鰹節を持参して祝いにきた（一二月一〇日）。このように玄固が幾たびとなく玄春邸に来訪している様子が「玄春日記」にみえる。玄固が観音様に参詣したのは玄成の名代としてではなく、むしろ親しい友人として、病気平癒をねがって自発的に祈念したと

解することはできないだろうか。

到来した見舞の品について摘記すると

一、菓子類

粔籹（おこし）、御萩、柏餅、椿餅、水飴、白玉汁粉、大福餅、煎餅、落雁など

一、果実類

柿、葡萄、栗など

一、副食物や魚介類

片栗粉、鶏卵、初茸、蒲鉾、カレイ、イナダ、小ビラメ、キス、アユなど

の幅広い品物がみられる。現今の常識からすると、はたして見舞品として適切な品であろうかと首をかしげざるをえないものもあるが、直接病人にたいする見舞の品というよりは、病家において看病にあたる人のためへの見舞品とかんがえれば肯けないこともない。

跋文をかいた島田筑波

日本書誌学大系として『島田筑波集』（二巻）が刊行されている。(7) 上巻（四一五ページ）には俳諧や浮世絵についての論文三七編が、下巻（三五九ページ）には歌舞伎や史伝をあつかった四三編の論文がおさめられて、すべて七七四ページ、八〇編におよぶ。これらの論文の初出はすべて関連分野の雑誌であり、その数は二八種におよんでいるが、その一例をあげると『今昔』、『史蹟名勝天然記念物』、『伝記』、『書物展望』、『浮世絵草紙』などわれわれには耳慣れない誌名がおおい。いかに活動範囲が広範におよんでいるかをしめしている。

『島田筑波集』の編者加藤定彦によれば、島田筑波は明治一八年（一八八五）に茨城県新治郡都和村（つわ）（現在

の土浦市）に生まれ、本名は一郎である。筑波とは岡野知十について学んだ俳句の号であり、茨城の名山筑波山に由来するのであろう。隻翠山房、神楽堂主人などの別号がある。青年期からの文献考証や実地踏査の癖がこうじて、小田原書房を経営して学術出版を手がけるようになった。さらにはさきにあげた月刊誌『今昔』を創刊して、この方面の研究誌としておおくの論文を掲載した。かたわら東京市職員や嘱託となって、『東京市史稿』をはじめ『御府内備考』『本郷区史』などの厖大な基礎史料の編纂や校訂に従事している。昭和二六年（一九五一）九月一八日に六六歳で死亡した。戦前昭和一七年には東京市淀橋区戸塚町三ノ八八〇に居住しているとの記録がのこっている。[8]

江戸学の人びと

島田筑波はおおくの史料をもとに江戸文化のあらゆる分野にわたって、その時代に活躍した人物の姿をえがいている。現今とみに盛んになった「江戸学」の先駆者の一人といってよいであろう。その論文をよむと、いかにもその筆致が森銑三に似ていることに気づく。二人の間にはかなり親密な交流が存在していたことが想像される。

森銑三は江戸学の第一人者である三田村鳶魚と面識をえて、その自宅でひらかれる江戸文学の輪講会に出席し、その席上で島田筑波と知合いになったという。[9]

昭和九年の夏、森銑三や渡辺刀水らが中心になって史伝研究会ともいうべき「三古会」が結成され、その第一回の会合が九月一日に無窮会の神習文庫でひらかれた。そのおりの出席者は羽倉敬尚、島田筑波、渡辺金造（刀水）、森銑三、森潤三郎など一四名であったという。ここにも島田筑波の名がみえる。

都合のつくものだけが集まって知識の交換を計り、相互の親睦も図ろう。簡素な会なので会則もいらない、会費もいらない、会長などの役員もおかないが、会の名称がないと不便なので稽古、尚古、考古を意味する三古というのはどうだろう、という渡辺刀水の提案をいれて、三古会という名称で以後月一回の会合が開催された。七〇回に

およぶ例会記録がのこっているが、この間に島田筑波が報告したという記録はない。[10]

その後もこの会合は連綿としてつづき、昭和四八年八月現在もなお三四〇数回にわたってつづいているという。[11]さらに森銑三が「既に四〇年といふ長い歳月を経てゐる」[12]とのべているように、おそらく五〇〇回にもおよぶ会合が重ねられていたにちがいない。

京都帝国大学文科大学の初代学長であり、安藤昌益や志筑忠雄、本田利明など、わが国の自然科学思想の先駆者たちをいちはやく評価した狩野亨吉と森銑三を結びつけたのは、ほかならぬ島田筑波だという。当時東大史料編纂所の一雇員であった森銑三のもとに、島田筑波が認めた紹介の名刺をもって狩野亨吉があらわれたというエピソードがある。[13]両者の親しい関係を彷彿とさせる光景であり、学問をもって結ばれた温かい友情が垣間見られる。

大正時代になって江戸時代を回顧し、あらためて江戸を研究しようという気運が高まったときに、三田村鳶魚を中心に『東海道中膝栗毛』の輪読という意欲的な事業がはじまった。そのメンバーに三村竹清や林若樹、島田筑波などがいた。[14]

日本医史学会員としての島田筑波

島田筑波は日本医史学会の会員であった。はたしてこの接点はいつにはじまったのであろうか。昭和二年一一月のことである。千葉県勝浦在部原村の江沢述明の家から三千巻ばかりの書物や書画がいくつかの古書籍商の手にわたり、翌三年九月に神田図書倶楽部で売立がおこなわれた。一方別に江沢家からでた反古類が島田筑波の手に帰した。

島田筑波が江沢家に関心をもつようになったのは、昭和二年に川原慶賀がかいた四〇枚ばかりの植物写生図を手にいれ、これが千葉の江沢という家からでたことを知って、はたしてこの江沢家とはどのような由来の家なのかと興味を覚えたことにはじまるという。その興味にひかれて蘭医添田一族の研究に手を染めて、添田道周から玄成、玄春にいたる三代を詳しくしることができた。[15]これをもってみると、島田筑波が添田家の事蹟に注目し始めたのは昭和初

期であるといえるとともに、これによって島田筑波が日本医史学会と関係をむすぶ機縁が生まれたものと思われる。

島田筑波が昭和五年一〇月一五日の本学会例会に出席したことが、「「本の話」を読みて」のなかに記載されている。

我々に江戸研究の道案内をさずけて下さった三村竹清先生が、最近「本の話」と云う著書を岡書院から出版された事を、私は十月十五日の晩の日本医史学会の講演会の帰途、武藤一郎さんから聞いた。[16]

とある。この日の出席者名簿には島田筑波はもちろんのこと、森銑三も武藤一郎の署名もある。[17]なおこの日の口演者は、のちにのべるように島田自身であった。

この文中で一般論として、学者にとって本は一つの財産であるから、なんとかしてこれを手にいれようと躍起になるものである。学者の中には自分の本はけっして人に貸さない、人の本ならやたらに借りたがる癖のあるものがいる。しかし本当の学者というのはそんなものではないとのべたあと、それにつづいて

この点に至ると、富士川游博士は、本当の学者であって、決して本の貸し借みをしたり、また秘密主義をとらないばかりか、大切な「疾の草紙」を展覧に便利なようにと、鋏で切りとって陳列されたのには、その胸襟の深いのに驚かされたと、ある博士からうけたまわって敬服したことがある。[16]

と富士川游にたいして心からの賛辞を呈している。

三度の例会発表

日本医史学会の例会記録によると、島田筑波は三度にわたって例会発表をおこなっている。第一回は昭和五年一〇月一五日で、「杉山検校」と題して報告しているが、このさいは報告者として「島田一郎」という名を使用している。一方例会出席者名簿には「島田筑波」とあるので、これがはたして同一人物か否かの検討にせまられた。島田筑波の本名が一郎であることはさきにのべたが、それだけの根拠で同一人物だと断定してしまうのを躊躇していた

ところ、これについては島田自身がのちの例会発表の冒頭において、「嘗て本会席上に於て杉山検校の談話をした」ことがある[18]、と明言していることにより解決することができた。

杉山検校についての論文は『中外医事新報』ではなく、『史蹟名勝天然記念物』に掲載され、のちに『島田筑波集』に収録された[19]。その小見出しを列記すると、

杉山検校の資料、一ツ眼説の原拠、杉山検校と江の島の関係、
杉山系譜をその墓所、総録の代々、杉山検校の功績、管鍼について、
著述、杉山検校と一ツ眼弁天

である。利用した資料は「当道大記録」と「即明院伝来記」、「当道式目」のほかに、富士川游が大正一三年五月一八日に、杉山総検校二百五十年祭記念講演会においておこなった講演であるというが、その内容については『富士川游著作集』にはない。

杉山検校というと、将軍綱吉から「褒美を取らせるからなんなりと申せ」といわれたときに、「眼が一つ欲しゅうございます」と申しでて、本所一ツ目の地を賜ったという逸話がのこっているが、これは寛政三年に相模国江の島弁財天の境内に建てられた「前総検校大僧都法印一真人伝」という碑文によって世に喧伝された伝説だという。

杉山検校の出生地についてはいろいろ説をなすものがあって、ある人は大和といい、ある人は遠州浜松というが、実は伊勢の津であると断定している。これにつづいて初代総検校杉山和一から十一代当主杉山重武までの系譜が略記されている。初代和一の墓は本所弥勒寺にあり、江の島の検校ヶ谷に分骨されているという。杉山検校の功績については富士川游の論文を根拠にして、鍼術に革新をくわえたことと、盲人に鍼術を教えたことの二つをあげている。

この原稿は昭和四年一〇月一四日にすでに完成していた。それから一年後に例会発表がおこなわれていることから、島田筑波はしっかりまとめた完全原稿を作ってから口演するという習慣をもっていたということができよう。

つぎの第二回目の例会報告にはいくらかの混乱がみられた。昭和八年四月例会の予告には「江戸時代の医家漫談」と題して口演予定のところ、四月一四日の例会当日は「急遽支障が生じたため富士川游之に代りて偉人病志に就て講演」したという。[20] どのような理由で欠演になったのか、それについての記載はない。

その責をはたすために、翌月の例会（五月四日）では同じ演題で報告をおこなった。抄録によると

（石坂）宗哲が歿したのは天保十二年とわかったが行年が不詳であった、所が宗哲の古希祝が天保十一年で、その時に配附した書を偶然の機会に入手したので宗哲の行年が七十二歳という事が明瞭になった。

とある。しかし古稀の祝いが天保一一年で、その翌年に死歿したのなら行年は七一歳でなければならないのではないかと思うのだが、本論ではこれがテーマではないのでこれ以上は立ちいらないことにする。

いまはこれにつづく抄録で

本会の席上で一寸質問されたことの機縁から石坂宗哲が世に出たわけであって、要するに常日頃心掛けて調べていたわからぬことが偶然のことから闡明される場合が少なくない。……研究にはそれぞれ専門家と連絡することが多大の利益を得られる捷径である。……兎に角、研究には同情と感激が必要なことである。[18]

とのべている点に注目したい。血眼になって史料をさがしていても一向に埒があかないことがありながら、ちょっと立止まってゆったりした気持ちで接した文書の中に大切な史料を見出すことがままある。常に頭の片隅にとどめておけば、何気なく接した文書が光輝く珠玉となって教えてくれることがあるのはよく経験するところである。「同情と感激」というのはこのことをさすのではないかと思う。あるいは常に謙虚な気持ちで史料と向かいあうことが肝要である、と教えているのかもしれない。

中村中倧についての報告

昭和一〇年一一月四日の例会に「中村中倧と其一族」と題して発表したのが第三回である。[21] 天保年間に刊行された『皇都名勝詩集』を手にいれ、それに捺されている「希月舎蔵」と刻された蔵書印から、「希月舎」が中村中倧の別号であることをつきとめ、さらにこれを足懸りとして中村中倧なる人物について探求の手をひろげた。

中村中倧の名は元恒、字ははじめ子成、のち大明といった。安永七年（一七七八）一一月一一日に信濃国伊那郡伊那部村（現在の伊那市）で中村淡斎の長男として生まれた。周防国岩国城主吉川氏の後裔だという。代々の医師の家に生まれた中倧は幼時から父にまなび、のち一五歳のときに高遠藩儒者坂本天山と松本藩儒者木沢天童に儒学をまなんだ。片田舎に閉じこもることをきらって京に上り、猪飼敬所に儒学を、中西深斎の息鷹山と吉田専意に古医方を学んだ。文政七年（一八二四）一〇月に故郷にかえって儒医として高遠藩につかえ、のち医学も兼学して医学館の創設に力をつくして名声を博したという。嘉永二年には事に連坐して伊那郡黒河内村（現在の伊那市）にながされたが、冤罪だったとのもっぱらの評判であり、嘉永四年（一八五一）九月三日に病歿した。ときに七四歳であった。中倧の主な著作をあげると「傷寒論用字例」「傷寒論作者考」「傷寒論句解」などの医書のほか、「大学私考」「大学経書」などの儒学関係の著書もある。[22]

中倧の父元茂は俳人であり医師である。諱は昌玄、淡斎、あるいは伯先（俳号）とも号した。一六歳で江戸にでて工藤周庵、桃井桃庵に医学を、稲葉黙斎、幸田誠之に儒学を学んで一九歳で帰郷して医を業とした。三六歳のおりに京都にでて医学、本草学を学んで帰郷し、その後三〇年間、伊那郡山寺村（現在の伊那市）にすんで地元の医療につくした。この地には昌玄に因んだ昌玄坂があり、村民からいかに慕われていたかを知ることができる。芭蕉句碑の建立など、蕉風俳諧の普及に功績があった。著書には「本邦医家小伝」「調剤録」などの医書のほか、「淡斎

詩集」などがある。[23]

この例会発表は中村中倫とその父元茂の著作を詳細に調べあげて報告するという内容豊かな講演であった。このような世にかくれた人物を発掘して報告する手法は、森銑三などのもっとも得意とするところで、これをみても島田筑波は、森銑三などと同臭の江戸学研究の有力な一員ということができよう。

森銑三と日本医史学会

森銑三も医史学会の例会に出席したことがある。森銑三の述べるところによると

私は史料編纂所に専職してゐた間に、博士に率いられる日本医史学会の例会にも、何回か出席して、博士の謦咳にも接してゐる。[24]

とある。博士とはもちろん富士川游である。森銑三が東大史料編纂所に勤務していたのは大正一五年から昭和一三年までなので、この間の例会記録をみると、例会出席は昭和三年一〇月と一一月、昭和四年一月、昭和五年一月、二月、一〇月、一二月、昭和八年二月、三月、四月、の一〇回におよんでいる。

昭和三年一一月には演者として登場している。すなわち一一月二一日におこなわれた例会では「東京帝国大学史料編纂掛」の肩書で「眼科医鈴木一貫」と題して報告した。鈴木一貫と竹村悔斎との関係と、一貫の弟子である鈴木道順についてのべている。[25]これはのちに「眼科医鈴木一貫――並にその門人鈴木道順――」として学会誌に掲載された。[26]ほかにも二編の論文が学会誌に収載されていて、昭和初期には森銑三は日本医史学会と少なからぬ関係があったことをしめしている。[27]

なお島田筑波には原著論文はなく、例会抄録として「中村中倫と其一族」の一編だけが見出されるにすぎないので、例会発表がのちに論文として実を結んだか否かは不明である。

島田筑波は演者として例会に参加した以外はただ一回しか出席していないので、口演回数こそ森銑三に勝るものの、はたして熱心な会員であったかということになるといささか首をかしげざるをえないが、森銑三も島田筑波も学問的業績が多岐にわたっているので、発表の場が医史学会に限られていたわけではなかったからであろう。

大正七年七月に三田村鳶魚や林若樹、寒川鼠骨などが相集って、榎本其角の自選句集『五元集』の輪読会が開催された。この輪読会に島田筑波も有力なメンバーの一員として最初から参加している。このときに柴田宵曲が筆記役をつとめ、まとめられた輪読会の成果は、「其角研究」と題して雑誌『ホトトギス』に発表された。[28]

『五元集』（四巻）は百万坊旨原の編纂にかかり、序文も同人がかいている。延享四年（一七四七）の刊行で、題名は芭蕉に入門してから、延宝以後天和、貞享、元禄、宝永の五元にわたる句集の意であり、その数千あまりの句を四季に分類している。これにつづいて六四〇句をおさめる『五元集拾遺』（一巻）は同じ延享四年に発刊されている。蕉門の第一人者其角の面目を十分にうかがうことができる句集である。[29]

森銑三や三田村鳶魚の江戸学を支えた功労者として、島田筑波や柴田宵曲の功績をたたえている言辞の一例をあげよう。

われわれの大先輩で、柴田宵曲さんとともに鳶魚江戸学を支えた島田筑波さんが、鳶魚さんのお家に出入りなさっていたころです。筑波さんが公文書館に入られたのが明治二十年（ママ）で、東京市史編纂委員として活躍されていました。公文書館の財部さんにうかがったのですが、『本所区史』や『麻布区史』にも関係しておられるんですね。それから『葛西史』ぼ翻刻があるし、『御府内備考』の「東京都社寺備考」のお仕事、それから昭和五、六年ごろから十年ぐらいまで『今昔』を編集しておられました。

鳶魚江戸学を支えた人としては、先ほどの柴田宵曲さんと、島田筑波さんのお二人が、いちばん大きかったのではないでしょうか。[30]

これは朝倉治彦の司会で、京橋図書館の安藤菊二と文教大学の槌田満文の三人によっておこなわれた座談会における安藤菊二の発言であり、この発言によって三田村鳶魚からたのまれて史料収集に協力をおしまなかった人物として、島田筑波の業蹟が後学から賞讃をうけていることがわかる。

おわりに

添田玄春の母にあたる法闡院の病状をしるした「法闡院病中日記」について報告した。これによって伊東玄朴を中心にして法闡院の治療に参加した医師の動静を探ることができた。また添田家の事蹟を明らかにし、「病中日記」に識語がしるした島田筑波、ならびに江戸学の重鎮森銑三と日本医史学会との関連についても考察をくわえた。

本稿の要旨は第一〇七回日本医史学会総会（中津）において発表の予定であったが、体調不良のため総会に参加することができず欠演してしまった。川嶋真人会長はじめ総会関係者や会員の方がたにご迷惑をおかけしたことを心からおわび申しあげる。

注と引用文献

（1）「法闡院病中日記」順天堂大学医学部医史学研究室山崎文庫蔵
（2）島田筑波「隠れたる蘭学者添田道周」『史蹟名勝天然記念物』四巻　三三五―三四四ページ　昭和四年　のちに『島田筑波集』下　青裳堂書店　昭和六一年　五二九―五三八ページに収録された。
（3）「添田玄春日記」順天堂大学医学部医史学研究室山崎文庫蔵
（4）「総御医師分限帳」（寛政一一年）『継興医報』三三号　一九ページ　明治二九年
（5）「総御医師分限帳」（文政一〇年）『日本教育史資料』七巻一九　幕府ノ部　六五二―六五五ページ　明治二三年

（6）深瀬泰旦「江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮し」『川崎市小児科医会会誌』三三号　三―三三ページ　平成一三年
のちに深瀬泰旦『天然痘根絶史――近代医学勃興期の人びと』思文閣出版　二〇〇二年　二〇四―二五四ページに収録された。
（7）加藤定彦編『島田筑波集』全二巻　青裳堂書店　上巻　昭和六一年五月二五日　下巻　昭和六二年七月二五日
（8）島田筑波「桂川甫周の生没年に就て答ふ」『日本医事新報』一〇三三号　二七―二八ページ　昭和一七年
（9）森銑三「思い出すことども」『森銑三著作集　続編』一五巻　中央公論社　一九九五年　二八ページ
（10）森銑三「三古会小記」三古会編『近世の学芸――史伝と考証』八木書店　昭和五一年　一―二五ページ　のちに『森銑三著作集　続編』一五巻　中央公論社　一九九五年　三五九―三八四ページに収録された。
（11）丸山季夫「森先生と三古会」『森銑三著作集月報』二号　七ページ　昭和四八年
（12）森銑三「三古会のことなど」『森銑三著作集　続編』一五巻　中央公論社　一九九五年　三八四―三八八ページ
（13）森銑三「狩野亨吉先生」『森銑三著作集　続編』六巻　中央公論社　一九九三年　二八二―二八八ページ
（14）森銑三「南方翁と江戸文学」『森銑三著作集　続編』五巻　中央公論社　一九九三年　四四三―四五三ページ
（15）島田筑波「吉原末期の三浦屋と江沢家に就て」『郊外』九巻　一一号　昭和三年　のちに加藤定彦編『島田筑波集』下
青裳堂書店　昭和六一年　五五七―五六三ページに収録された。
（16）島田筑波「「本の話」を読みて」『史蹟名勝天然記念物』五巻　一一号　昭和五年　のちに加藤定彦編『島田筑波集』下
青裳堂書店　昭和六一年　七〇四―七一〇ページに収録された。
（17）武藤一郎は例会出席や展示に積極的な会員であった。『中外医事新報』に掲載された論文には
「坪井信道の書簡」『中外医事新報』一一三三号　一〇九―一一〇ページ　昭和三年
「露西亜学者小野寺丹元を中心とせる書簡」『中外医事新報』一一四一号　五九七―五九八ページ　昭和三年
「広瀬元恭と甲斐の朋友」『中外医事新報』一一五四号　六四一―六四二ページ　昭和四年
などがあり、昭和五年一〇月例会には所蔵する「産前道具書」（天和二年）を展示し、翌昭和六年七月例会では竹内玄同や
坪井信道の書を展示した。昭和一五年と同一七年の学会名簿に「東京市神田区紺屋町二〇」とあるので、おそらくこの地

で開業していた産婦人科医師であろうと思われる。例会出席は昭和三年から同一八年まで年に四、五回は出席するという精勤ぶりである。

(18) 島田筑波「医家漫談」『中外医事新報』一一九五号　二二五―二二六ページ　昭和八年

(19) 島田筑波「杉山検校和一」『史蹟名勝天然記念物』四巻　一一号　昭和四年　のちに加藤定彦編『島田筑波集』下　青裳堂書店　昭和六一年　五一三―五二八ページ　に収録された。

(20) 「日本医史学会四月例会」『中外医事新報』一一九四号　一八九ページ　昭和八年

(21) 島田筑波「中村中倫と其一族」『中外医事新報』一二二五号　四六五ページ　昭和一〇年

(22) 「中村中倫」竹岡友三『医家人名辞典』　南江堂　昭和六年　二八〇―二八一ページ

(23) 「伯先」『国書人名辞典』四巻　岩波書店　一六ページ　一九九八年

(24) 森銑三「富士川游博士とその著作」『森銑三著作集　続編』六巻　中央公論社　一九九三年　五〇〇―五〇二ページ

(25) 「日本医史学会一一月例会」『中外医事新報』一一四二号　六六〇―六六一ページ　昭和三年

(26) 森銑三「眼科医鈴木一貫――並にその門人鈴木道順――」『中外医事新報』一一四四号　五七―六二ページ　昭和四年
これはのちに「眼科医鈴木一貫」として『森銑三著作集』五巻　中央公論社　一七三―一七八ページに収録された。

(27) 『中外医事新報』に掲載された森銑三の論文には引用文献（26）のほかにつぎの二編がある。
「戸田旭山のことども」『中外医事新報』一一四二号　六〇九―六二一ページ　昭和三年
「杉田伯元の「観源為朝遺器本末紀事」」同書　一一五八号　一六九―一七八ページ　昭和五年
これらはのちに「戸田旭山」として『森銑三著作集』五巻　中央公論社　昭和四八年　一四〇―一五三ページに、また「杉田伯元遺聞」として『森銑三著作集』五巻　中央公論社　昭和四八年　一六二―一七二ページにそれぞれ収録された。

(28) 柴田宵曲「無始無終」『団扇の画』岩波文庫　二〇〇〇年　二二一―二六一ページ

(29) 飯田正一「五元集」『国史大事典』五巻　吉川弘文館　昭和六〇年　七二四ページ

(30) 「江戸の地名と年中行事」朝倉治彦編『鳶魚江戸学　座談集』中央公論社　一九九八年　一二九―一三〇ページ

"Hosen-in Byochu Nikki" (Clinical Documents of Hosen-in) and Shimada Tsukuba

Yasuaki FUKASE

Hosen-in was the mother of Soeda Genshun, who was the doctor of the Tokugawa Shogunate (Yoriai-isi) and one of the 83-contributors to the Otamagaike Institutions for Vaccination. She was attacked with an illness from 12 of August to 15 of October Tenpou 13 (1842). "Hosen- in Byochu Nikki" is a clinical diary manuscript on her illness. It includes information about the doctors treating her, the many relatives who visited her and the gifts presented by them. The manuscript contains the memoranda of Shimada Tsukuba, who was one of Edo-gaku (Edo Learning School) savants and who made the achievements of the Soeda Family clear.